「安心した」の声　数多くあがる

令和6年度群馬県公立高校選抜合格発表

翠巒
Mini Press
第184号
2024/4/8

編集・発行
高崎高校新聞部

3月5日に令和6年度群馬県公立高校入学者選抜の合格発表が行なわれた。倍率は1．21倍と例年の後期入試選抜と同程度の倍率であった。今年度の試験では、前期選抜、後期選抜制の廃止や、総合型、特色型と呼ばれる新しい選抜形態が開始されるなどの大きな変化があった。そのような試練を突破した受検者たちが、高高の門をくぐり、入学書類などの受け取りを行なった。

そこで、高高に合格した人々に、合格と判明した際の心境と、入学後の抱負や将来の夢について話を伺った。

篠原健吾くん（長野郷）
受検中からすでに合格の自信があったため、合格が分かった際は「やっぱりだ」と感じた。高高に合格できてよかったと安心している。入学後はラグビー部に入部し、体格を活かして活躍できるよう頑張っていきたい。

田嶋龍介くん（群馬南）
素直にうれしかった。塾への送迎をしてくれた親に心から感謝を伝えたい。入学後は、バスケ部に入部し文武両道の生活を送れるようになりたいと思う。

友と 喜びを分かち合う合格者たち

入学手続き書類を受け取る合格者

新生活に思いを馳せる合格者たち

萩原悠真くん（安中第一）
ガッツポーズが出るくらいうれしかった。入学後は弓道部に入部して活躍したいと思う。将来は建築学科のある国公立大学に進み、建築士を目指したい。

小林俊太くん（安中第一）
合格発表がネット上で行なわれたが、自分の番号が突然表示されてしまったため拍子抜けしてしまった。しかし、次第に合格したという実感と安心感が同時に湧き上がってきた。翠巒祭などのイベントにも積極的に参加していきたいが、勉強との両立が大変と聞いたため、少し悩ましい。とにかく学校生活を楽しんでいきたい。

新井蓮くん（藤岡東）
まずは、合格できたことに安心した。同じ中学で高高に志願した仲間も全員合格できたのがよかったと思う。中学校以上に、レベルの高い生徒たちと過ごすことになるが、自分自身も彼らに負けないよう頑張っていきたい。

吉川楓人くん（太田藪塚本町）
合格と分かった際は、素直に安心した。私の中学校からは私一人しか高高に志願しなかったため、少し心細かったが、バレーボール関係の他校の友人が一緒に受検しており心強かった。入学後もバレー部に入り、バレーを続けていきたい。

吉江雅くん（吉井西）
家族3人で合否発表のサイトを見ていた。最初に母が自分の番号を見つけて「あった！」と大きな声を上げ、その後私も目視で確認をした。確認した瞬間は、合格してよかったという安心感を強く抱いた。入学後は水泳部に入り、文武両道を体現したい。

上原拓己くん（群馬南）
合格したと分かった瞬間、うれしさと安堵で胸がいっぱいになった。3年間の努力が実ってよかったと思う。入学後は、水泳部に入るとともに、好きな教科である数学の勉強を頑張っていきたい。

清水永遠くん（並江）
受検後は、手ごたえがなく、自信もなかったが、合格できて本当に嬉しい。また、受検という大きな壁を乗り越えることができて安心している。入学までの春休みは、合格した友だちと喜びを共有したり、遊びにも出かけたりしたい。入学後は高高生として、文武両道の生活を送れるよう努力していきたい。

◇◆◇◆◇◆◇

新入生は、4月に期待と不安を持ち合わせて、再び校門をくぐる。新天地での生活では、予想以上に大変な場面もあるだろう。しかし、高高で新しく構築される人間関係は、その困難を乗り越えるのに役立つはずだ。ぜひ、新入生には他者との交流を楽しんでもらいたい。（新井そら）

求む！新聞部員

我らが高高新聞部は、3年生3人、2年生6人の計9人で、顧問の大隅先生、副顧問の六本木先生と箕輪先生の指導のもと、活動している。高高には様々な伝統的な部活動があるが、新聞部もその1つである。今年の1月に発行したブランケット（一般的な新聞と同じサイズ）は第304号を迎え、今回発行したミニプレス（B4サイズ）は第184号となる。去年の第37回群馬県高校新聞コンクールでは、最高賞である知事賞を受賞した。活動時間は主に平日の放課後であり、場所は理科棟1階の新聞部室だ。各々の興味や関心を持った人や事柄に取材や調査を行ない、約1カ月に1回新聞を発行している。

高高新聞部は、新聞を始めから製作している。取り扱う内容の選定、紙面割の決定や記事の執筆、新聞に載せたい写真の撮影など、ほぼ全ての新聞製作の工程を、基本的に自分たちで行なっている。私たちは新聞製作をとおして、文章を正しく作る力を身につけ、新聞への知見を深めている。

新入生のみなさんには、これから入部してみたい部活動はあるだろうか。新聞部は、新入生の積極的な入部を歓迎している。（荒井）

NOTE

新1年生の皆さん、入学おめでとう。この春休みは、晴れやかな思いで普段できないようなことを、思う存分楽しんだのではないだろうか。私も、高校生になる前の春休みに、かけがえのない楽しい一時を過ごしていた。▼しかし、そのような生活のまま高高へ入学してしまうのは、少し危ないように感じる。なぜなら、高高での生活は「時間に余裕を持って動かなければ」とにかく忙しいからだ。▼具体的に私の例を紹介する。入学後はすぐに、模試や赤城合宿などに参加し、息つく間もなく翠巒祭準備に入った。中間考査を経て、翠巒祭を経験した後、そのまま期末考査まで忙しかったことを覚えている。夏休み以降も、行事や勉強、部活のいずれかに背中を追われて生活する毎日が続き、気づけばもう2年生だ。▼では、その全てをこなすことは絶対的に不可能なのだろうか。私自身は決してそうではないと考える。▼もちろん、それぞれに求められるレベルは高い。しかし、どの項目も先を見通して、余裕を持って行動できていれば、自分の抱える タスクの量に苦しむことはないはずだ。▼新入生の皆さんに問いたい。自分のやるべきことから、逃げてしまってはいないだろうか。その行動は後に自分自身を苦しめることになる。貴重な高高での3年間を無駄にしてしまうことになるだろう。だからこそ、計画的に余裕のある行動をとることを強く勧める。（新井そら）

紙面割担当　表・新井そ　裏・荒井、木村